

CROSS T&T

Comprehensive Research Organization for Science and Society

No.55

2017.2

Thinking Theme (特集) つくば & 土浦の諸相

- 圏央道の開通により期待される効果について 伊與田弘樹
 自然資源活用の地域振興への挑戦 高田 正澄
 第17回世界湖沼会議の茨城県開催
 茨城県生活環境部環境対策課
 「明るい豊かな社会」の実現に向けて 石川 一幸
 官民協働コミュニティバスの発着点 小林まゆみ
 土浦新能 第20回開催に臨む 増山 栄
 筑波山と土浦のガマの油 林 正一
 レンコン優良系統選抜の取り組み 堀井 学

Tsukuba (つくばからの発信)

- 国産トリュフの栽培化に向けた研究 河原 孝行
 つくば発ベンチャーの最新トレンド 斎田 陽介
 中性子ビームでみる永久磁石材料の内部磁気構造
 上野 哲

Tokai (東海からの発信)

- 東海村のホッケー近況と発展に向けて 小島 久幸
 “科学” との新しい付き合い方を支援する
 土屋 智子 / 松崎 真吾

Today & Tomorrow (今日・明日)

- 展覧会「牛久藩主とその時代」を振りかえって 木本 拳周
 岩間と植芝盛平 一合気道生誕の地に行く 浅田 順
 プレインターンシップの提案(Ⅱ) 上野 健治 / 青木 貞雄

霞ヶ浦・土浦入

筑波山と土浦のガマの油

ガマの油のルーツと三人の兵助の関係は？

筑波山がまの油売り口上研究会・会長 林 正一

ガマの油の故郷“筑波山”は、標高877メートルとさほど高い山ではないが、富士山と並ぶ関東の名山として『古事記』『万葉集』の昔から多くの人々に親しまれ愛されてきた。関東平野の中央に、さえぎるものもなくそびえている筑波山は、どの方角からも仰ぐことができる。このため、江戸時代には、歌川広重作の『名所江戸百景』の背景に数多く描かれるなど、江戸庶民にとってランドマーク的な山であったと同時に、日光や成田と並ぶ身近な観光地として栄えていたようである。近年では、標高1000メートル以下でありながら“日本百名山”にも選ばれ、つくばエクスプレスの開通なども伴い、多くの登山愛好家などで賑わっている。その筑波山の山中に、週末や行楽シーズンともなれば、「サーサーお立ち合い、ご用とお急ぎでない方は、ゆっくりと聞いておいで…」と名調子のガマの油売りの口上が響きわたるのだ。

★ガマの油のルーツは★

筑波山とガマの油の結びつきについての起源をたどれば、話は江戸時代初期までさかのぼる。徳川家康は、筑波山が江戸城の鬼門の方角にあたることから、徳川家の祈願所と定め、知足院中禅寺に寺領五百石を寄付した。

その二代目住職の光譽上人こうよしょうにんが、大坂冬の陣・夏の陣に徳川軍の従軍僧として参加した時のことである。上人は陣中で、戦勝祈願をしたり、戦死者の供養などをしながら、負傷者の救護もしていたので、徳川軍の兵士から大変に喜ばれていた。手当には、上人が持っていた自家製の不思議な膏薬こうやくを用いたという。これを塗ると出血はピタリと止

まり、痛みもスーッとひいて回復が早かったそうである。その膏薬は“ガマ上人の油薬”と呼ばれるようになった。以来ガマの油は、陣中で使われた膏薬、すなわち「陣中膏ガマの油」として、筑波山にデビューし、山の旅籠や茶店でも、筑波山名物として貝殻に詰めて売られるようになった。というのがガマの油のルーツとされる。

このように口上の起源は江戸時代にさかのぼるものとされるが、筑波山名物としての「ガマの油」が筑波山に現れるのは戦後のことなのである。昭和23年(1948)に、筑波山観光協会が観光の振興策として、最初の「がま供養祭」を催した。現在行われている「ガマまつり」の前身である。この「がま供養祭」の余興には落語家の春風亭柳橋が呼ばれ「がまの油」を演じている。これが現在に続く口上の始まりなのである。

地元でもこれをきっかけに口上の練習が始まり、昭和32年(1957)ごろ、豊職人であった稲葉卯之吉氏が「第17代永井兵助」を名乗り、宴会の余興などで演じるようになった。稲葉氏が、なぜ第17代を名乗るようになったのか、その経緯ははっきりしていない。その後、岡野寛人氏が第18代目を襲名している。この両名がテレビやラジオに出演することで「筑波山のガマ」を全国に広めたといっても過言ではない。

ところが、昭和58年(1983)春のこと、“筑波山がまの油発祥の地”は、土浦市内の旧・築地町(現在の城北町)であると、地元が名乗りを上げたのだ。

古老の話によると、ガマの油の軟膏は、明治時代の終わり頃から、土浦築地町の旧足軽長屋あしがらで作られ、東京方面の香具師かぐしによって売られていたそ



「四六、五六はどこで見分ける」がまの油売り口上を熱演する筆者

うだ。原料となるガマは、土浦・真鍋の赤池あたりで捕獲したもので、それを天日で乾燥させ、菜種油のようなものとロウを混ぜて煮詰め、とろりとした液体にしたところを、ヘラで貝殻に詰め、商品化していたとのこと。この薬は、香具師によって“常州(茨城県)筑波山麓土浦の陣中膏ガマの油”として売られ、口上が有名になるにつれ、いつの間にか「筑波山のガマの油」となってしまったという。この言い伝えを後世に残しておこうと、『がまの油発祥の地』と題した碑が、町内会の有志によって、昭和58年5月、白水稻荷神社境内に建てられた。

★ガマの油の仕掛け人は★

筑波山名物として伝えられてきた「陣中膏ガマの油」を、一躍全国的に有名にしたアイディアマンは、いったい誰なのか。

筑波山麓地方では、その元祖を一般的に“永井兵助”として伝えており、第18代永井兵助の岡野寛人氏によって、落語をもとに確立された口上文は、現在でも正調として受け継がれている。岡

野氏は、声量・演技とも素晴らしく、筆者も約50年前に一番弟子として指導を受け、現在に至っている。

では、この永井兵助とはどんな人物だったのか。兵助の生まれ故郷とされる筑波山麓の土浦市永井では、昭和52年(1977)に元・新治村教育長の岡田富美也氏と筆者が地元に残る話ということで、巷説『永井村の兵助』をまとめ発表した。今では、これが筑波山地方で“定説化”している。

巷説を要約すると、兵助は永井村の農家に生まれ、幼名を平助という。宝暦3年(1753)、16歳の時に江戸に出て、深川の木場問屋で働いていた。冬には、あかぎれや霜焼けに悩まされた。生薬屋で「ガマの油」を買って使ったところ、良く効いたことから、どうしたらこの薬を売ることが出来るだろうかと考えた。浅草へ出かけては、大道商人が民衆の心理をうまくつかみ、客寄せしている様子をつぶさに研究した。そして、薬を大量に仕入れ、早速縁日で口上よろしく試したが、田舎育ちのぎこちなさと方言のせいで、江戸っ子には全然通じなかった。

困りはてた平助は、同じ長屋の講釈師に泣きついて、口上文はもちろんのこと、服装^{かつこう}恰好まで親切に指導してもらったという。その後、江戸町奉行から刀を差すことを許され、「兵助」という新しい名まで賜ったということで、兵助の評判は、あつという間に広まり、大量に仕入れた菓は、またたく間に売り切れ、気をよくした兵助は、「以後、これで身を立てよう」と決心した。その時、兵助22歳であった。

以上のようなもってもらしい話なのだが、その内容はともかく、長井兵助そのものは架空の人物ではなく、実在した有名人なのである。

明治17年(1884)2月14日の『開花新聞』を見ると、広告欄に「浅草蔵前に居住して営業すること既に百五十年に及んでいます……」と浅草南元町(東京都台東区)の長井兵助という人が広告を出している。しかし、その名は、「永井兵助」ではなく「長井兵助」なのだ。この長井兵助は、松井源水の門下生といわれ、居合抜きや歯抜き、歯磨き粉売りなどをしていたようである。長井家は、文政年間(1818～1830)御成御用を仰せつかり、将軍や若君に得意の居合抜きをお目にかけていたとのことである。明治時代まで五代続いた長井家も、歯医者も兼ねて商売をしていたが、時には寄席などにも出ていたようで、明治時代の中頃、11代目で店を閉じたと伝えられる。

それでは、この長井兵助が、ガマの油売りの元祖かとなるとそうではないようである。では、今のガマの油売りの口上や扮装は、いったいどこから生まれてきたのか。実は落語の中からなのである。

明治・大正時代の名人落語家といわれた三遊亭円右が演じた「両国八景」という長編落語の中に“筑波山はガマの油売り”が出てくる。円右の弟子の一朝の義兄である三吉が、両国(東京都墨田区)でガマの油屋をやっており、これに歯磨きやガマの油を売っていた長井兵助の居合抜き扮装をミックスさせてガマ口上の名セリフが完成したのではないかとされている。

江戸、東海道などで売られているガマの油の口上は、ほとんどが筑波山を引用してるが、落語の中に「がまの油」を売る口上が登場したのはいつ

頃なのであろうか。稲葉氏・岡野氏が行っていた口上がそもそも、落語から口上の部分を抜き取ったものであった。しかし、落語「がまの油」に関する速記が少ない。理由としては、酔態を文字で表すことや、口上の見事な言い立て芸を速記するのが困難だったことなどが挙げられるだろう。

一番古い速記は、雑誌『文芸倶楽部』大正7年(1918)4月増刊号の、初代三遊亭円右の「両国八景」である。しかし、一番最初に「がまの油」売りの口上が取り入れられた落語は、古典落語の「仇討屋」(別名「高田馬場」)といわれている。

大阪の落語家四代目桂米団治が若い頃に制作した自筆手控え帳で、大正初年頃に書かれた『昔々笑話演題集』の中の「浪花桂家落語演題集」には、落語「高田馬場」が記載されているが、同じものの「東京落語演題集」には記載されていない。このことから、「がまの油」の口上が落語の中に取り入れられたのは、大阪が先であることが推測できる。大道の「がまの油」商人はともかく、落語として寄席で演じられた口上は、伊吹山が最初で、筑波山はその後だということがいえよう。

★平賀源内・考案説★

昭和56年(1981)ごろ、筆者は、知人の郷土史家からアドバイスを受け、「もしかして、ガマの油売り口上を創作したのは、平賀源内ではなかろうか」との仮説をたてた。なぜなら、口上を幾度となく読み返すと、口上の内容の豊かさ、段構成は一般の人には考え及ばないものがあるなど、作者はかなりの知識人であり、特に医学・薬学に詳しい人物に絞られてきたのだ。

平賀源内は、エレキテルで有名な江戸時代の学者であるが、29歳の時に故郷を離れ、江戸へ移った。宝暦6年(1756)のことである。翌年には湯島で物産会「東都薬品会」を開いている。『巷説』でいう兵助は、宝暦3年に16歳で江戸に出ている。22歳の時に口上を考案しガマの油を売ったというから、宝暦9年、源内はこの時32歳の計算になる。源内の私宅は、東都薬品会の手続き説明の項の最後に「愚居 江戸神田鍛冶町二丁目不動新道」と出ている。

源内は、宝暦13年(1763)7月、『物類品^{ぶつるいひんしつ}陶』

六巻を出版した。これは、ポルトガルなどから渡ってきた薬品類の解説書であるが、この中に、ガマの油売り口上に出てくる「テレメンテイナ」の解説がある。和名を「篤耨香」とし、「篤耨香出口蠟國樹之脂也 樹如松形其香老即溢出」とあることから、植物性油脂、松根脂のようなものであることがわかる。

薬物に詳しく、両国付近に住み、戯作も多数残して見事な文体を「平賀ぶり」といわしめた源内ならば、ガマの油売り口上のあの見事な文句を考案した人物ではないかというのもわかる。さらに、明和6年(1769)、源内が43歳の時、ゑびす屋兵助という人物に歯磨き粉売りの広告「はこいりはみがき漱石香」を書いている。

その文から候体^{せうたい}をはずすと、歯磨き粉売りの口上となる。ガマの油売り口上ほど長くはないが、前口上があり、製法、効能などを述べている。「富士の山ほど功能有之」、しかし「高が歯をみがく肝心にて其外の功能はきかずとも害にもならずまた傳へられた其人も丸で馬鹿でもなく候へばよもや悪しくはあるまい」と、ユーモアたっぷりである。また、ガマの油売り口上でもいっている「金看板」がここでも述べられている。「皆様御最願

御取立にて段々繁昌仕表店罷出金看板を輝かせ」とある。これらを考えると、すべてに天才的器用者であった源内が、ガマの油売り口上の考案者であるという説は首肯できる。

それでは、前述した巷説『永井村の兵助』の中で、平助が同じ長屋の講釈師に泣きついて売り口上を考えてもらう場面があったが、講釈師=平賀源内という可能性はないのだろうか。もしあり得るとすれば、ゑびす屋兵助もまた永井兵助と同一人物と考えることができるかもしれない。限られた史料の中では、これら諸説の結論を今後の研究課題として残しておくことにする。

いずれにしても、永井兵助なる人物は、調べれば調べるほど、夢とロマンに満ちあふれた、おもしろい人物なのである。きっと今頃は、草葉の陰でガマ口上を口ずさんでいるのかもしれない。

【引用・参考文献】

「江戸時代人づくり風土記・茨城」陣中膏ガマの油(林 正一)

「序 伝統の創造と観光のまなざし」(浜 日出夫)



林 正一 (はやし まさいち)

1952年土浦市生まれ。土浦市広報広聴課長、土浦市観光協会専務理事、土浦市教育委員会参事兼スポーツ振興課長などを歴任。筑波山周辺の歴史やガマの油の由来など調査研究・講演のほか実演も行う。筑波山がまの油売り口上伝承者で口上歴49年。

現在、公益社団法人土浦市シルバー人材センター事務局長。